

研究テーマ

既習事項を実際の自然や日常生活に適用し、
表現することができる児童を育てるための指導の工夫

提案者 肥田 幸則

I 研究テーマについて

1 テーマ設定の理由

本研究における「既習事項」とは、理科の学習で得た知識・技能のことである。そして、本研究で目指す「既習事項を実際の自然や日常生活に適用し、表現することができる児童」とは、児童自ら理科で学習したことが当てはまる場面を見いだし、その場面について学習したことを使いながら説明できる児童のことである。本研究では、日常生活の事象をつなぐ見方を身に付けることで、このような児童を育てていく。

これまで私は、理科と日常生活との関連に焦点を当て、研究を進めてきた。単元を通して、授業の終末時に、既習事項が当てはまる日常生活の場面を繰り返し提示することで、児童は既習事項を使いながら、その場面における事象について説明することができた。しかし、児童が自ら理科で学習したことが実際の自然の中で成り立っていることをとらえたり、日常生活の中で役立てられていることを確かめたりする姿までは見られなかった。このことから、既習事項を日常生活に当てはめて考えることができて、児童自らその場面を見い出すことに対しては課題があるといえる。このような課題が見られた原因として、既習事項が日常生活の場面にどのように当てはまるのか、その見方が分からないことが考えられる。身の回りには、様々な自然の事物・現象が溢れており、またその一つ一つも複雑である。そのため、当てはまる場面があっても、児童がその存在に気付かないことがある。既習事項を他の場面には当てはめて考えることができるようにするためには、日常生活における事象に対する見方を身に付ける必要があるのではないかと考える。

日常生活の事象に対する見方を身に付けるようにするために、学習の進め方を見直してみた。これまでは、理科の学習を通して学んだ事象を、日常生活の事象に当てはめて考えるといった展開であった。この時、一般的に理科の学習を通して学んだ事象は単純化されたものであり、単純化された事象で、日常生活の複雑な事象を説明していることになる。この進め方は、既習事項を当てはめて考えるだけであれば非常に有効であるといえる。しかし、本研究で目指す児童は、既習事項を提示された場面には当てはめて考えることができる児童ではなく、その場面をも自分で見いだし当てはめて考えることができる児童である。自分で場面を見いだしせるようにするためには、日常生活における事象に対する見方を身に付けることができる学習が必要である。そこで、本研究では、日常生活の事象を、別の日常生活の事象に当てはめて考えるようにする。つまり、従来のような単純化された事象から複雑な事象を説明する形式ではなく、複雑な事象から複雑な事象を説明するといった学習の進め方である。一見、複雑な事象同士を扱うことで、より事象が複雑化され、場面を見い出すのが難しくなると考えられる。しかし、複数の事象同士を比較し関係付けることによって、両者の共通点が見え、つながりが見えてくる。このように自分の力で複雑な事象同士をつなぐ見方を身に付けることで、既習事項が当てはまる場面を見い出すことができると考えている。なお、本研究は「てこの働き」で実践する。ここでは、複雑な事象として、てこの性質が利用されている道具を扱い、身の回りの物同士をつなぐ見方を身に付けるようにするものとする。

そこで、「既習事項を実際の自然や日常生活に適用し、表現することができる児童を育てるための指導の工夫」をテーマとし、研究を進めていくことにした。



2 テーマにせまるための方策

視 点

身の回りの物同士をつなぐ見方を身に付けることで、既習事項を実際の自然や日常生活に適用し、表現することができる。

〈手立て〉

- (1) 身の回りにある具体物を比較しながら操作することで、身の回りの物同士をつなぐ見方を身に付けられるようにする。

